

---

# 青空の下。

岬

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
青空の下。

【Nコード】  
N7783B

【作者名】  
岬

【あらすじ】  
ひとり欠けてしまった、二人の話です。

親友の彼女を好きになった。でも、2人とも好きだったから、いさぎよく身を引いた。

よくある話だと思う。

けど、やっぱり悲しくて苦しくて申し訳なくて、しばらく泣いてしまった。

それでも。

そんな俺でも、平気だったんだよ。2人が、一緒にいることを許してくれたから。

なのに、というわけだ。

俺とーかちんを置いて行くなんて。

藤夏を任せた、なんてそんなセリフ、嬉しくもなんとねーよバカトシ。

\*\*\*

見上げた空は、どこまでも青い。こんな空を見上げると、嫌でも思いだしてしまうヤツがいる。トシ。お前はこの空のどこかにいるというんだろうか。

いつも浸ってしまう後ろ向きな感傷は、半年経った今でも、まだ健在なようだ。

学校の屋上で、たったひとり。

手に持った菓子パンを食べる口は一向に進まない。

だって不味いよ。3人が1人になるだけでこんなに違うのかと、妙に感心してしまうくらい。

あーあ、はやまったかな。

まだここは駄目だった。思い出しちゃうんだよ、楽しかったあの

時とかあの時を。

俺は、なかば食べることを諦めて、固いコンクリートの上にだらしと手足を投げ出した。どこまでも高い空を見上げていると、もう、何もかもどうでもよくなる。例えば午後の授業とか。

不真面目な考えで目を閉じると、キィ、と屋上のドアの耳障りな音がした。

誰だ。

でも起きるのもめんどくさい。

ぐだぐだと寝そべったまましていると、急に辺りが暗くなった。面倒ながらうつすら目を開くと、突然影が落ちた原因がすぐにわかる。目の前の見慣れた人物のしわざだ。

「あー……とーかちん」

「あら朝ぶりじゃない、ユタカちゃん」

全開の笑顔を見ながら、そっぴや屋上で会うのはいなくなっただけから初めてだな、と思った。

\*\*\*

「こんなとこで何してんの。サボリ？」

「そーだよ。気持ちいいじゃないこんな天気いいし」

「まあいいご身分ですこと」

フェンスの前に、隣り合って言葉を交わす。何してんだろぅ、と思わないでもない。すでに5限目は始まった。

でも、俺もとーかちんも何も言わない。だからいーんだそれです。少し言葉のやりとりをすると、俺もとーかちんも何も言わなくなつた。すぐに屋上に静けさが満ちる。

それは嫌いじゃない沈黙。とーかちんとか……トシと一緒にだった

ら。

「それにしても、さあ」

とーかちんが、ぽつりと言った。

「こんな空見てると、信じらんないねえ、アイツがいないなんて」

「……うん」

「バカだったし、何度死んでも死ななそうなヤツだった」

ほんとにね。

ちら、ととーかちんの方を見ると、透き通った瞳でフェンスの向こう側を見つめていた。

ここじゃないどこか、きつとトシのいる場所を見つめてるんじゃないかな、と思った。だって、綺麗過ぎて今にも消えてしまいそーだよ。最後に見た、トシの笑顔にどことなく似ている。

俺も、フェンスの向こう、空の彼方に目を向けた。

そうすれば、見える気がした。

とーかちんの見てるもの。トシの居る場所。

漠然と、きつと明るくてきれいで、こんな青空みたいな所なんじゃないかな、と思う。

でも、いくら目を凝らしても、空の青以外なんにも見えなかった。

「だけど、もういないんだよね」

しばらくして、とーかちんが小さく言った。

「いないんだよ。こことか、よく私達がいた場所に来ると、はつきりわかるんだ」

その声は震えていて、何となく、顔を見てはいけない気がした。言葉の代わりに、とーかちんの肩に寄りかかると、俺にも重みがか

かった。

「いないのに、ね。青い空を見るだけで、そこでアイツが笑ってるような、そんな気がするんだ」

ばかだよ、と乾いた笑いをもらすとーかちん。

「じゃあ、俺もばかだね」

「うん、ユタカもバカ」

問いかけに、即答される。

「でもさー」

「うん？」

「俺、トシは本当の本当に空のどこかにいるんじゃないかと思うんだな」

「うん、私もそう思う」

「おまけに俺らのこと見守ってるんじゃないかと思う」

「あらあら、奇遇ね、私もです」

「そして、トシなら、ちょっとくらいよくよしても許してくれると思うのですよ」

「……………。うん、そうだね」

きつとトシなら、あの日から何も変わってない俺らを責めたりしないだろーね。

しょうがないヤツらだ、て笑いとばして、けつとばすだろーきつと。あのバカゆえの豪快さで。

久しぶりにしっかりと思い描いたトシに、暖かく、けどそれ以上に苦しくなる。

「ねえねえユタカさん」

「なんだいとーかちん」

「……泣いてるの？」

「……とーかちんこそ」

気付けば、熱いものが頬をつたっていた。

何でだろう。

トシがいなくなって、もうそれにも慣れたはずなのに。

俺達は、お互いじつくりと顔を見合わせて、吹き出した。顔が真っ赤だ。涙どころか鼻水まで垂れてる。

そんなとーかちんの顔を見ながら、その隣にいる、トシの姿を描いてみた。こんな青空にふさわしい、思いきり笑顔の。

ああそうか。と、何となく思った。

そうか、悲劇の人でも美化した思い出でも何でもない、いつものトシを思い出したのは、今日が初めてだ。

明日も明後日もいつまでも続くと思っていた日常の中のトシ。ごめんね、いつものバカで口が悪くて乱暴者のくせに、他のヤツのことばっか考えてるお前を忘れてて。

やっとやっと、欠けてる部分が見つかった気がする。

トシ、ごめんね、ありがとう。

それから俺ととーかちんは、泣いた。ずっとずっと、時間がわかんないくらい。声を張り上げて、ときどき罵声を吐きながら。

とーかちんも、同じ気持ちだったのかな。

こんな泣いたのは、初めてだった。いなくなる前も、その後も。不思議だ。

苦しさだけ、溶けて流れて行く感覚がする。

だってトシはここにいるんだよ。

楽しかったときも、辛かったときも、消えたりなんかしない。だからトシ……これからもよろしく。

\*\*\*

「あーあ、泣いた泣いた！ もう意味分かんね！」  
「いつの間にか暗いし！ 意味分かんね！」

どれくらい経ったのか。気付いたら、辺りは、既に日が隠れて薄暗かった。どこからともなく、カラスの鳴き声が聞こえるのがちょっとせつない。

「もう、こんなの初めて！」

「俺もだねー！」

「でもすつきりした気が、しないでもないー！」

「どっちだよ！ でも俺もそんな気がしないでもないー！」

言い合って、ゲラゲラ笑いあう。

本当にもう、何がなんだか分かんない。

ただ、確かに分かることは、変にふっきれたこと。忘れるんじゃない、受け入れただけ。これから、そのまんまのトシとーかちゃんと、生きていくために。

あと、もうひとつ。こんな一瞬がたまらなく愛しいこと。

……くさいこと考えてる辺り、俺もけっこういかれちゃったのかもしれないけど。でも、嘘じゃない。

「なー、とーかちん」

「ハイハイ何ですかユタカくん」



「また明日もよろしく」

「何、急に」

「明後日もしあさってもその次の日もずっとずっとよろしく」

「……いーよ、よろしくね」

（後書き）

2人の恋というよりは、3人の繋がりを書きたかった話でした。  
カテゴリはこれでいいのかどうか悩みますが。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7783b/>

---

青空の下。

2011年1月27日09時59分発行